

# LA 立教会だより

Volume 3, Issue 5

www.stpaul-la.com

August, 2009

## 会長からのご挨拶

孫恵美(S. 43 史学)

残暑お見舞い申し上げます。

3 月末にありました総会后、皆様のお手元には新しい名簿が届いたことと存じます。変更がありましたらご連絡ください。4 月には今年も母校で開催されました海外支部長会議並びに地域社会支部長会議に、坂本さんと出席いたしました。このご報告も皆様のお手元に届いている事と存じます。今回正式に立教インターナショナルのウェブサイトが承認されました。海外にあって同じ大学で学んだ者同志の横のつながりを大切にという意図で作られました。お時間のあるときにのぞいてみて下さい。[www.stpaul-int.com](http://www.stpaul-int.com) 又、LA 立教会のアドレスも新しく [www.stpaul-la.com](http://www.stpaul-la.com) となりました。

武田整さん(H. 1 経営)、尾堂陽子さん(H. 11 仏文)、FENG 紅桃さん(H. 18 観光修士)の三名の方が新会員となられました。長年 LA 立教会のためにご尽力下さいました長倉雅彦さん(S. 61 産業)、美樹さん(S. 61 法学)ご夫妻が雅彦さんの転勤で、ニューヨークに移られました。野球部出身でいらしたので、2010 年にも 2007 年同様お手伝いして頂くつもりでございましたが、残念です。短い滞在でしたが LA 立教会に参加して下さいました曲清光さん(H. 13 経営)がご帰国されました。UC Irvine で学んでいらした本橋永至さん(H. 15 社会)も学業を終えられて帰国なさいました。

立教大学創立 135 周年記念に AAJW (American Association of Japanese University Women) との共催で行いました、8 月 8 日のバイオリンとピアノのコンサートは伊原在 LA 日本国総領事御夫妻をはじめとした 250 名の聴衆が、Mr. Silvian Iticovici と Dr. Hiroshi Taguchi の素晴らしい演奏を楽しみました。お手伝い下さいました市川さん(S. 31 経済)、上井さん(S. 34 英文)、柿本さん(S. 42 英文)、武井さん(S. 44 経済)、麻田さん(H. 6 仏文)、谷上さん(H. 8 法学)、澤田さん(H. 11 仏文)、ありがとうございました。

10 月 25 日のホームカミングデーに今年も参加予定でおります。その時期に在京の方はぜひ見に行して下さい。またご友人、ご家族の方にもお声掛けをお願いいたします。お洒落なクリスマスグッズを用意しております。

最後に来年 2010 年は野球部アメリカ遠征の年となり、江草校友会会長が同時期に LA を訪問されます。大橋総長が見えるかどうか、まだ分かってはおりませんが、坂口監督、野球部員、総勢 100 名近くになると聞いております。LA 立教会が健在で活動している事を母校の皆様には是非知っていただきたいと思っております。ご協力をよろしくお願いいたします。LA 立教会へのご意見がございましたらご遠慮なくご連絡ください。

## <2009 年行事予定>

10 月 17 日(土) 朗読の会 堀田紀真(S. 39 社会)

LA 市立図書館小東京分館 1 時半～3 時

演題予定：糸車 山本周五郎

昨年に続いて二度目の LA 公演となります。

11 月 29 日(日) Town & Gown 主催

小林陽子さん(平成 8 年卒)講師によるクレイ作品

詳細は追って Town & Gown 幹事よりご連絡します。

## <2010 年行事予定>

2 月 27 日(土) 硬式野球部アメリカ遠征 LA 歓迎会

場所：Lawry's

時間：11 時半～2 時

3 月 28 日(日)総会

場所：San Antonio Winery

時間：1 時～4 時

## <2009 年度行事報告>

6 月 14 日(日) 大学対抗ゴルフ大会

笹田周(H. 10 英文)

6 月 14 日、毎年恒例の大学対抗ゴルフが、快晴の下 Brookside Golf Course の #1 コースで開催されました。我が LA 立教会は始めは参加者が足りず、チームとして参加できるか微妙な感じでしたが塚原さん、谷さん、坂田さん、谷上さん、笹田の 5 名が参加ということになり、当日皆ベストを尽くしました。結果の方は残念ながらチームグロス 499 の最下位に終わりましたが来年は何とかして最下位脱出、そして上位進出をめざしたいと思います。参加者の皆様、本当にありがとうございました。

6 月 27 日(土) いま評判のモロッコ料理を楽しむ会

孫恵美

立教会からは 8 名の出席でしたが、友人たち、家族が参加をしてくれ、おいしく珍しいものを楽しみました。駐車場がわかりづらかったこともあって、お食事は予定より遅れて始まりました。

アパタイザー盛り合わせは、イスラエルサラダ、クスクスサラダ、ハマス(茄子と豆)、ハマス(トマト)、ひよ豆で作られたお団子で、ピタブレッドは材料を吟味されているせいか、ほかのお店のピタブレッドと違ってとてもおいしいとの皆様からのコメントでした。メインディッシュのチキンタジ

ーンはフルーツと一緒に煮込んであり、とてもやわらかく又複雑な味で、サフランライスととてもよくあっていました。締めくくりには大変珍しい茄子のデザートをいただきました。爽やかなミントティーがお料理に大変良くあい、皆様との賑やかな会話もあって楽しいランチオンでした。食べ切れなかったお料理は、皆様全員がお土産としてお持ち帰りになりました。

**7月9日(木) ACK レセプション, Anaheim Hilton**  
上井貴代子(S. 34 英文)

AC/KEEP レセプションに参加して  
(American Committee for Kiyosato Educational and Experiment Project) [ack@ackkeep.org](mailto:ack@ackkeep.org)

皆様にもメールでお知らせしました KEEP レセプションに孫会長と私が出席してまいりました。

7月9日、木曜日の午後5時から Anaheim Hilton であり、6時に予定されていた KEEP 紹介の Presentation をめがけて早めに出かけたのですが、普通1時間のドライビングが2時間かかりました。

この日は米国聖公会の3年に一度の総会が同じホテルで開かれていて、そのプログラムの中に KEEP 紹介の機会を入れたようで、50人くらいの牧師や ACKKEEP の役員の方や、総会参加者で KEEP をサポートしている方、興味のある方、そして私達立教関係者でした。今回は残念ながら日本からはどなたも見えていませんでした。とても国際色豊かな会合でした。

KEEP の紹介はアメリカキープ委員会 Director の Jennifer Corwin さんが、パワーポイントを使って、KEEP の設立者 Paul Rusch 先生の紹介、歴史、そして現在の活動状況を見せながらのプレゼンテーションでした。特にこの春オープンされた国際会議センターが素晴らしく、ここで今後はたくさんの環境保護や教育に関する国際会議やトレーニングが開かれるそうです。温泉が出るようになり、温泉つきの宿泊施設もありますので、皆様日本にいらしたら、是非清里を訪問してください。山梨県の八つ岳高原にあり、自然の美しいところです。KEEP の紹介はこの会報にのってありますので、省きますが、もっと当地在住の LARK の皆様にも参加していただきたいかったです。集まりでした。



清泉寮 New Annex

**8月8日(土) ヴァイオリンとピアノのコンサート**  
市川明子(S. 31 経済)



会場を埋めた人々の鳴りやまぬ総立ちの拍手!! 演奏者を初めとして、田口氏の“人となり”を知り、力量を信じて、又、Violin の調べを楽しみに聴きに来てくださった方々、そしてこの日のために惜しみなく影の力を尽くした人達をも含め

て、この時をすべての人々の力で成しとげたと言う心からの喜びを、一人一人が受け止めていた事と思います。

どこまで会場を埋める事が出来るかとの心配をよそに、予想外の入場者のあったことも演奏者の心に喜びを与えた事でしょう。

Violin solo も Piano solo、弦の流れや響きも、Piano のキーの上をはしる指先が奏でる音色も申し分なく。。

そして Violin と Piano のデュエットは、奏者二人の呼吸がぴったりと合ったようにお互いがほどよいバランスを保って、時には寄り添い、また時には競い合って二つの音色が重なり合う素晴らしい瞬間が生まれて、人の心を捉えたことでしょう。

演奏者のお二人はこれまで年一度ホームコンサートの場でお互いを知り、回を重ねるごとにお互いの音楽を知り、年ごとに相手の心を読み、ゆづり合ってきたのでしょう。今回は程よい空間の中で、のびのびと心ゆくまで音を奏でることが出来たのだと思います。

最後にこの催しを手懸けて下さった方々の、企画の段階から終演後の明かりが消え人々が去り会場のドアが閉じるまでの間の長い期間、本当に細部に至るまでの心配りのなされていた事を、忘れてはならないと思います。

Silvian Iticovici, Hiroshi Taguchi 両氏の今後、益々、技の研かれます事!!

August 8<sup>th</sup>, 2009  
この時の終りに!!

“Performing the music of”

Bela Bartok: Sonata for solo Vio

Performed by Silvian Iticovici

Sergei Rachmaninoff: Preludes from Op. 23

Performed by Hiroshi Taguchi

Robert Schumann: Toccata C Major. Op. 7

Performed by Hiroshi Taguchi

Robert Schumann: Sonata for Piano and Violin

Performed by Silvian Iticovici & Hiroshi Taguchi

Haruka Watanabe: Aria Religioso

Performed by Silvian Iticovici & Hiroshi Taguchi

Sergei Rachmaninoff: Vocalise Op. 34 No. 14

Performed by Silvian Iticovici & Hiroshi Taguchi

This concert is a celebration of Rikkyo University's 135th anniversary.

:presented by AAJUW and LA Rikkyo Kai

## <旅行記>

### 兄との旅行

澤田暁恵 (H. 11 仏文)

今年の独立記念日にコネチカットにいる4歳上の兄と会う事になった。月日が長く空いてしまったためか、お互いに連絡が取りづらくなり、気がつけば最後に会ってから7年が過ぎていた。数ヶ月前、ロサンゼルスに住む私から思いつきで兄に電話をかけたことで、トントン拍子に今回の旅行が計画された。それからというもの、仕事でも旅行の事ばかり考え、兄との再会がとても楽しみになった。兄はコネチカットのひどく田舎にある某大学で言語学の研究をしている。昔から、そしてやはり今も少々変わっているところがあり、この時代に自動車のライセンスも携帯電話も持っておらず、しかも数年前までは大学の研究室に住みついていたということを電話で知った。今回の旅行では、私が運転してニューヨーク、コネチカット、ボストンを移動する事になった。

7月1日、朝、JFK 空港のターミナルの出口をでるやいなや、リュックをしょってベレー帽をかぶって、猫のイラストのTシャツを着ている背の高い兄の姿を見た。雰囲気も服装も私の知っている兄のイメージと変わっておらず安心した。子供の頃、私は兄の事をとても尊敬していたけれど、勉強好きの兄と遊び好きの私の間ではぶつかる事も多く、喧嘩も絶えなかった。私がいまにも頑固で折れない性格なので、最後には「お前としゃべるとバカになる」とあきれた兄がしばしば部屋に閉じこもってしまった。空港からマンハッタンに向かう途中、そんな兄の捨てゼリフが私の頭をよぎりながら、私は兄に話かけるたびに緊張した。ついに、7年ぶりに再会を果たした兄と妹の初めての旅行である。

なにかとタイプの違う二人だが、唯一の共通点がある。それはアート好きなことである。そこで、兄は、ニューヨークで美術館巡りの特典チケットを用意してくれていた。依然として、兄に話かけるのは多少緊張するものの、お互い大人になり、性格も丸くなった様子が兄から伺えたので、徐々に打ち解けることができた。旅行は兄の行きがかった、Frank Lloyd Wright の建築デザインで有名なグッゲンハイム美術館から始まった。彼の大胆かつモダンで美しい螺旋状建築が目を引く。ちょうど、美術館の設計と Frank Lloyd Wright 没後 50 年を記念し、彼の特別展も開催されていた。200 を超えるドローイングが展示されていた。その中には東京の帝国ホテルのものもあった。Wright のドローイングは精密かつ丁寧。それだけでも部屋に飾りたくなるような芸術作品であった。私たちは、すべてのドローイングを見るのに時間をかけすぎてしまい、次の美術館に向かう頃には午後を過ぎていた。その後、食事もそこそこに、次のメトロポリタン美術館に向かった。この美術館の展示数も名実においても世界最高というだけあって、回りきれないので、的を絞って見る事にした。その中でもデンドール神殿やミイラ、石版のある古代エジプト館は目を見張るものがあった。兄は壁画に彫られた象形文字の人の名前にあたる部分などの



読み方を教えてくれた。翌日はアメリカ自然史博物館。プラネタリウム、天井から吊りさがっている 90 フィートの巨大なシロナガスクジラやイカの模型部屋を埋め尽くすマンモスの化石、人食い花のような妙な植物を見学した。最後の美術館はニューヨーク近代美術館。ここで兄と私が意気投合したのが Jackson Pollock の作品だった。絵の具を缶からたらしたり、吹き飛ばしたりして描いた巨大な作品。彼の作品は色使い、絵の具の飛び方、狂気的な感じが格好よすぎた。

コネチカットへの道中、私の記憶も残っていない頃に家族で住んでいたニューヨーク郊外のアパートや、兄の通った小学校、最寄りのハーツデール駅などに立ち寄り、兄の自宅に向かった。兄の住まいは予想以上にしっかりとしたアパートで、ルームメイトも雰囲気の良い女の子だったのでとても安心した。朝が苦手だったはずの兄が私より早起きをして、コーヒーを淹れたり、ご飯を炊いてハンバーグを作ってくれたり、フルーツを切ったりしてくれた。夜は、マットレスとブランケットを私に貸してくれて、自分は慣れているから平気だといいいながら、カーペットの上で寝たりと、兄らしい気遣いで私をもてなしてくれた。お礼に私は兄にズボン 2 本にシャツ 2 枚、靴 1 足を買ってプレゼントした。ついでに私の付けていた皮のベルトもあげた。わたしの大好きな兄にはかっこよくいてほしいという思いで、つい奮発しすぎてしまったかも知れない。その後、兄の研究室や大学周辺などを見学し、翌日、ボストンに向かった。最後のボストンでは、今回私が一番楽しみにしていたボストン現代美術館を訪れた。

OBEY1GIANTS で有名な Shepard Fairey の特別展が催されていた。今はオバマ大統領のプロモーションポスター (HOPE) で一躍有名になった彼だが、以前から私が尊敬しているグラフィティアーティストである。ただ、違法の落書きを町中にするため、先日ボストンで器物損害の容疑で 15 回目の逮捕を迎えてしまったというハチャメチャなアーティストである。彼のシルクスクリーンとコラージュで仕上げる作品から発するメッセージ性とデザインセンスは私の憧れである。いつか、私も彼のように見ている人を奮い立たせる事ができるようなデザイナーとして成長したい。夕方は、ホエールウォッチングに参加して鯨を見た。そして、ボストンの夜は JULY4TH の花火で締めくくられた。今までにない、最高の旅行だった。空港で兄と別れるとき、兄を見つめる私の目は涙でいっぱいになってしまった。子どもの頃と変わらず、今でも兄は、心優しく、気遣いがあって、博識で、誠実で、私の大好きな尊敬できる兄のままだった。次に兄に会える日が今から楽しみでならない。

### 第三の故郷ジュネーブ (Genève)

坂本計洋 (S. 52 経済)

私が初めてジュネーブに行ったのは、1971 年 8 月で、立教高校 2 年時の英国旅行団の一員としてでした。その時は、その旅行の主目的であった、英国での 3 週間のプログラムをこなした後で、あまり時間がありませんでした。しかも私は、チターというアルプス地方特有の楽器を求めて、ジュネーブ中の楽器屋を探し回っていましたが、それ以外の事は、何も覚えていませんでした。

それから 16 年後の 1987 年の冬に、イギリス、ヨークシャー

で知り合ったスイス人のお招きで、急遽フライトとホテルをブックして飛んで行ったのが、それから数年間の、私とジュネーブとのお付き合いの始まりでした。

私がジュネーブを訪れたのは、イギリス、イタリア、ドイツへの出張の一番最後に簡単な報告を兼ねた骨休めが目的でしたので、行き方も、意識的に、色々なバリエーションを楽しみました。ミラノから列車で、コモ湖畔を通り、ループ式の長いトンネルでアルプスを越えてジュネーブ駅に到着したり、ミラノからレンタカーでコルチナダンベツツォ、シャモニーを経由して入ったり、ちょっと遠回りをしてエビアンからフェリーでレマン湖を渡って入ったりと、全く時間を気にしていないと他からは思われても仕方のない形で、出張の最後を飾っていました。もちろん、ジュネーブの後、南回りで中国、日本での仕事が控えていたことも多々ありましたので、普通にフライトで出入りもしていましたが・・・



ジュネーブでの一番の楽しみは、もちろん食事です。グリエールチーズの産地でもあり、スイス人も年に1度は必ず食べると言われているチーズフォンデュが、そのリストの上の方に挙げられます。これは、市

内のエーデルワイス・ホテルのダイニングルームで食べても美味しいのですが、地元の人に連れて行ってもらう、小さなカフェの、ルクルーゼのポットで、さりげなく出されるフォンデュには適いません。そして、バゲットは、ジャーマンスイスのスタイルの様に几帳面に角切りされたものではなく、ただ輪切りにされたバゲットが山積みされるフレンチスイスのスタイルの方が、私にとっては、何処かをくすぐられたような心地にさせられます。しかし、チーズフォンデュはスイス人でも年に1度くらいしか食べない訳で、これを行く度に食べる訳にはいきません。

でも、どうしてもチーズでなければ！と言う方には、ラクレットをお勧めします。これなら、ジャガイモを中心に、他の野菜も沢山食べることになりまして、これこそフレンチスイスならではの食べ物だと思います。友人宅に招かれますと、兎や鱈を使った料理が多いですね。そして、私のリストのトップに挙げられますのは、モンブラン通りをレマン湖を背にして、真っ直ぐジュネーブ駅に向かって、駅の1ブロック手前右側に在るCafé de Parisというレストランです。カフェ・ド・パリ・ソースと言うのを耳にされたり、それを真似たものを味わったことの有る方は多いと思いますが、ここが本家本元です。確か朝6時頃から夜中の1時頃まで開いていると記憶していますが、メニューは1つのみで、サーロインステーキのカフェ・ド・パリ・ソース添えのみなのです。それに食べ放題のポンフリ。お店に入ると、ピッツェリアを思わせるピクニックベンチの様なテーブルがずらーっと並べられていて、席に案内されると、「ルージュかブランか？」と尋ねられるのみで、それ以外にメニューは有りません。「焼き方は？」と心配されるかと思いますが、それも、アルコールランプの上にセットされたグリルの上に、淡いセージ色の、未だ半分は固体のバッテリーなソースが乗った、スライスされたサーロインが出てきますので、自分で好みの焼き加減に出

来るという具合ですので、ご安心あれ。こうして書いていなくても無性に食べたくなるほど、このソースと肉、そして、ポンフリのコンビネーションは病み付きになり、又、どこか郷愁を誘うのです。

私は、どういう訳か、何時も、ジュネーブに一歩足を踏み入れた瞬間に、何とも言えない安らぎを感じるのです。よく、「ジュネーブは本物のスイスとは言えないよ！」なんて言われていますが、私には、そんなことは関係なく、ジュネーブにしかない何かを感じるのです。映画の見すぎなのかも知れませんが、自分が、ドイツ兵に追われて、命からがらでスイスの国境を越えるという夢をよく見るのです。もしかすると、前世でそういう体験をしていたのかも知れませんか？ そんな訳で、私にとって、このジュネーブは、日本、アメリカに次ぐ第三の故郷なのです。

### <シカゴ立教会より>

シカゴ立教会会長

安藤 正博(S.55 経済)

シカゴ立教会は、英文名を「St. Paul's University Alumni Association of Chicago」とし、イリノイ州シカゴ地区のみならず、米国中西部各州に在住する校友及び留学生諸氏をもって構成されます。立教建学の精神をふまえ、会員相互の親睦と友好を図ること、また地域貢献を目的としています。



会員による親睦会の他に、米国中西部の協定校に留学中の現役大学生のシカゴ訪問時には大歓迎したり、地元のNPO(シカゴ日米協会やJASC)に家庭用健康機器等を寄贈する活動も行っていきます。

シカゴ立教会の紹介はこのぐらいにして、私の好きなスポーツ関連に話題を変えることにします。

最近では、2006年にシカゴは全米の都市の中で最もスポーツが盛んな都市として選出されています。

2つのメジャーリーグ・ベースボールのチーム(カブス、ホワイトソックス)、NFLのベアーズ、90年代にマイケル・ジョーダンを擁し6回のNBAチャンピオンに輝いたブルズ、WNBAのスカイ、2つのアイスホッケーチーム(ブラック・ホークス、ウルブズ)、サッカーのファイヤーなどエキサイティングなプロチームが年間を通して熱戦を繰り広げファンを魅了しています。

私はバスケットボールを長年続けてきたこともあり、シカゴに移り住んでからというもの、シカゴ・ブルズの試合を数限りなく観戦してきました。レギュラーシーズンは、各チームとも82試合ですが、ここ2-3年おそらく9割以上を見ている筈です。(ほとんどがTVで、生で観戦するのは数試合だけです。)

先日(2009年6月17日)の事ですが、日本人の同僚とランチの後スターバックスでコーヒーを買おうとパーキングに車を止めると、元シカゴ・ブルズのセンター・プレイヤー、ビル・ウェニントンがブルズのジャージー姿で車に乗るところ

でした。「ハイ、ビル！今シーズンは良いシーズンだったね。来年はもっとだね。」と声をかけると、「そうだね。」とにこやかな受け答え。本当に感じのよい大男(210cm)です。彼は、現在ブルズの全試合をラジオ実況放送をしています。1993-1999にはブルズに在籍し控えのセンター・プレイヤーとし3回のNBAチャンピオンを経験しています。カナダのモントリオール出身で、1984年と1992年のカナダ・ナショナルチームの主力選手でもありました。

これまでも、何人ものブルズの選手達にいろいろな場所で会いました。レストラン、ガソリンスタンド、文房具ストア、コンビニなど。ブルズの練習場(体育館)が近所にあるからです。マイケル・ジョーダンの家には、ハロウィーンの日には子供と一緒に行きキャンディーをもらいに行きました。どの年だったかは、忘れましたがマイケルが家の中から(私に?)手を振りました。そのキャンディーを子供から取り上げ、ゆっくりといただきました。その夜、夢の中の私は、MJのように宙を舞い華麗なダンクで得点を重ねるスーパースターになりました。

2016年のオリンピックの候補地として名乗りをあげているシカゴは、東京とも争っているわけですが、オバマ大統領やマイケル・ジョーダンも後押しするシカゴに軍配が上がる可能性は高いと見ています。ただ、「初の南米開催」の声がIOC内で湧き上がった時には、シカゴの苦戦もあり得ると思いますが。。。結果は10月のようですが、ミシガン湖を望む美しい眺望、整った競技場、そして何よりスポーツを愛するシカゴアンが住む世界有数のスポーツ・シティ、シカゴはオリンピック開催地としてふさわしいと純粋に思っています。

2009年6月18日

## 清里 KEEP より

Laura Vilanova

For many Japan is a high tech world floating on history and traditions that brings many to experience its culture, food, arts, dance, and innumerable treasures. Friends ask me how is Tokyo, Kyoto, Nara, but I have to remind them that I am not in Tokyo, that I am living in the Yatsugatake Highlands in Kiyosato overlooking the Southern Japan Alps, Mt. Fuji, and the Chichibu Mountains. Let me tell you about a Japan that you have not visited yet, but that should be on your travel list.



For the past two years I have been working for KEEP (Kiyosato Educational Experiment Project.) I have come to learn the extraordinary history of Dr. Paul Rusch in Japan and have witnessed his legacy in the day to day life at KEEP. It was summer when I first arrived and everywhere I looked there were droves of Japanese walking around the grounds, visiting the environmental center, enjoying the Seisen-Ryo, eating ice-cream, bird watching, and enjoying good-old fashion family time. The natural

beauty of this place, with its majestic view of Fuji and endless blue sky had everyone walking at a slower pace, enjoying conversations, and focusing on what was so important to Paul Rusch, human relationships.

Next I would meet my co-workers, a group of dedicated Japanese working tirelessly in the day to day operations of running KEEP and moving forward with Rusch's work and dreams. The work is still based on people to people exchange. Every person that comes to KEEP is served and cared for in the same manner Rusch did his work, one individual at a time. The days at KEEP are long, the needs of visitors carry on into the night or begin at early morning with guided walks in the forest. Children at Forester School are attending their first camp, alone or with family members, a group of retirees is painting outside the Farm Shop, a group of ballerinas are practicing in the main hall, a group from Taiwan is visiting the Yatsugatake Nature Center to better understand how they can build a similar facility back home, and another day at KEEP begins and ends with dozens of visitors served on a one to one basis. Somehow with a staff of 88 KEEP manages to meet the needs of all its visitors, many who will be back the following year. Once people experience KEEP, they continue coming year after year. This year with the opening of the new International Training and Exchange Center, which was built with the purpose of furthering Rusch's work, is hosting guests that are enjoying the lovely hotel facilities and starting this summer will host conferences and dialogues. Visiting KEEP is a chance to reconnect with nature, with oneself, and with others. It's a space to pursue different educational interests but also to learn a very important history that we all have a duty to promote and safeguard for future generations.

These past two years at KEEP I have worked alongside the Japanese staff putting in very long hours and feeling their exhaustion as they wake up every morning and serve every visitor with a smile. Why do they do it? Why do I do it? If you come to KEEP you will see the potential and future Paul Rusch envisioned. If you learn the history, visit the archives, and then walk around KEEP you will surely tell others about it, and join KEEP in furthering Paul Rusch's vision. KEEP's primary concern is: What can we do to help bring about world peace? This is Paul Rusch's legacy, he worked towards a sustainable society, he labored tirelessly to build a living message for Japan and the rest world. If you are planning to take a vacation anytime soon, I urge you to come visit us at KEEP. I promise you one of the most spectacular views of Mt. Fuji, some of the best ice-cream you have ever tasted, a feeling of wellness, and the beginning of your relationship with KEEP.

## 「歓喜の歌」コンサートに参加して

長田 稔 (S. 41 経済)

日系人と在米日本人で組織した素人合唱団「Bridging USA and Japan」(日米の懸け橋)が、七月十日夜ロサンゼルスウォルト・ディズニー・コンサートホールでベートーベン第九交響曲「歓喜の歌」を合唱した。総勢 380 人がアジア・アメリカ・シンフォニーと共演し、約 2000 人の聴衆を魅了し、最後には観客が総立ちし、ブラボーの声が鳴り止まず大成功で終了した。



わが母校からは市川明子さんと長倉雅彦さんと私が参加した。市川さんは、日本で何回も第九を歌われており、約八ヶ月の練習は何の問題もなかったが、今回特に感じたことは、男性の合唱が迫力があつたとの事で、特に最初の男性だけで合唱する「フロイデ」(歓喜)の音が非常に元気があり、そのお陰で気持ちよく最後まで歌えたとの事です。長倉さんは一緒に練習はされたのですが、とても残念なことに本番の日に用事ができ欠席されました。私は第九は初めての挑戦のうえに、ドイツ語で歌わねばならないのでとても苦労しました。私の所属するロサンゼルス・メンズ・グリークラブは四月の末に十周年記念の定期演奏会があつたため、四月末までは第九の練習が週一度のみでしたが、五月になってからは週三度の練習に加え、自宅でも練習を重ねました。ドイツ語の難しさに加え、プロのオーケストラで歌うということ、今までと違って 380 人余の大勢で歌うことなど、本番の週になりました。でも、大丈夫だろうかという不安があつたのですが、舞台上に立った時には本当に心の底から喜びがわいてくるような気持ちで、歌うことが出来ました。終了後、シカゴからこの演奏会を聴きにきていました娘から、「ダディ、素晴らしかった!鳥肌が立って涙が出そうになった。」といわれた時は、合唱って本当にいいものなんだなという思いを強くしました。世界のデズニホールで歌えたこと、本番で最高の力を発揮出来たと先生方からお褒めの言葉をいただいたこと、二度も三度もスタンディングオベーションを受けたことは、これからも何度も思い出すのではと思います。

## <新会員紹介>

### 1. 武田 整

2. 1989 年(平成元年)卒

3. 経済学部経営学科

4. 1992-1998 シカゴ、2003-現在 CA 州 計 12 年

5. 帰任命令が出たので逆単身赴任のつもりでしたが土壇場で転職してこちらで家族と生活しています。

駐在員でなくなったのを機に立教会に加入しました。皆様よろしくお願ひ致します。

6. 毎晩 CA 州のグレープジュースを飲むのが楽しみです。

会を通じて何か地域社会に貢献できれば良いと考えます。

### 1. 尾堂陽子(旧姓一万田)

2. 1999 年卒

3. 文学部フランス文学科

4. 在米年数 7 年 留学

5. ファイナンシャルプランナーの勉強の為渡米しました。アメリカフリーマガジン frontline にてコラムを連載させて頂きましたが、それをきっかけに LA 立教会よりお声を掛けて頂いた次第です。たまにブログを更新していますのでお暇な時にはこちらまで遊びにいらしてください。

<http://ameblo.jp/tomoro-san/>

### 1. 馮 紅桃 (Feng Hongtao)

2. 2004 学士

2006 修士

3. 観光学部 観光学科

観光研究課 観光学科

4. 夫の転職で 2008 年から LA 在住となりました。

5. 私は馮紅桃と申します。中国人ですが、日本料理が大好きです。1999 年から 2006 年まで日本で留学しました。学校をしながら塾で中国語を教えたり、旅行会社でアルバイトしたりして、毎日忙しくて充実した日々を過ごして、沢山の日本人の友達ができました。現在 JTB ロサンゼルス支店で働いております。性格は明るくて前向きタイプです。異文化及び異国の人々との交流が大好きです。

## <お知らせ>

立教大学ホームカミングデー(10 月 25 日 日曜)の為のクリスマス・クラフト workshop を下記の要領で行っております。

場所: 孫宅 3867 Royal Woods Drive, Sherman Oaks, CA 91403 Tel: 818-788-4852 [emi\\_sun2000@yahoo.com](mailto:emi_sun2000@yahoo.com)

日時: 10 時ごろから 4 時ごろまで open しておりますので、ご都合の良い時間にいらしてください。簡単なサラダをご用意いたしますが、お弁当持参でいらして下さい。

8 月 24 日(月)、31 日(月)

9 月 5 日(土)、7 日(月)、12 日(土)、14 日(月)、19 日(土)

\*はさみとワイヤーカッター、もしお持ちでしたら、グルーガンをご持参下さい。

オレンジ、サウスベイ方面で、お宅をオープンしても良い方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さい。

## 立教大学硬式野球部 2010年アメリカ遠征予定表

Feb. 22 (Mon)	ロサンゼルス到着 午後：軽い練習 @ R. Smith B. C.
Feb. 23 (Tue)	6:00 pm 親善試合 @ University of California, Irvine
Feb. 24 (Wed)	1:00 pm 親善試合 @ University of Southern California
Feb. 25 (Thu)	打撃&投球練習 @ Reggie Smith Baseball Center
Feb. 26 (Fri)	打撃&投球練習 @ Reggie Smith Baseball Center
Feb. 27 (Sat)	LA 立教会による歓迎会 Lawry's 11時半～2時
Feb. 28 (Sun)	5:00 pm 親善試合 @ Fresno Pacific University
Mar. 1 (Mon)	フレズノ市での日米野球に関する史料、施設の見学、関係者による講演会
Mar. 2 (Tue)	2:00 pm 親善試合 @ Stanford University
Mar. 3 (Wed)	2:00 pm 親善試合 @ University of San Francisco
Mar. 4 (Thu)	SF 立教会による歓迎会
Mar. 5 (Fri)	サンフランシスコから帰国

\*2009年8月現在

試合開始時間などの変更も予想されます。

[www.stpaul-la.com](http://www.stpaul-la.com) 掲示板アップデートをご覧ください。

2010年立教大学硬式野球部アメリカ遠征の予定がきましたので、ここにお知らせします。多くの校友の方の観戦、歓迎会への参加を、よろしくお願いいたします。

### <特別寄稿>

#### 「立教野球部とのかかわり」

大友良行(S.40 法学)

★私が子供のころの1950年前後は、東京6大学野球の全盛期でした。プロ野球よりも人気があり、ラジオ中継も毎試合放送されていました。私は当時、東京の四谷に住んでいました。まさに神宮球場のお膝元です。学校に行っても6大学野球の話題でもちきりです。でも殆どどのクラスメートが「早稲田だ、慶応だ」と言ってミーハーみたいに騒いでいましたが、私はそのころから筋金入りの「立教命、反早慶」を旗印に、決して誰にも譲りませんでした。私の叔父たちが立教卒だったことがその理由です。そのことで、仲間と喧嘩になることもよくありました。立教の試合は、物心ついた頃からよく見に行きました。早朝から並ばないと入場できないほど、毎試合超満員でした。でも立教は、なかなか優勝できませんでした。今でもそうですが…。でも1953年に小島訓



一投手で優勝。1957年には、長嶋茂雄、本屋敷錦吾、杉浦忠選手が大活躍して優勝。しかも長嶋選手は、8号ホームランを最終戦に放って6大学新記録を達成。3選手が卒業後の翌年1958年に、五代友和、片岡宏雄、高林恒夫選手らで4連覇した様子をこの目でしっかりと見てきました。自他ともに認める「立教大好き人間」になるのはごく自然のなりゆきでした。

私も高校野球に取り組みました。神宮でたて縞の立教のユニホームを着て活躍することを夢見ていました。当時、都立で一番強いといわれていた高校へ入りました。王貞治選手で春のセンバツ甲子園大会で優勝した早稲田実業から練習試合を申し込まれるほど評判の学校でした。でも試合当日、王選手は来ませんでした。二軍メンバーばかりでした…。

高校時代、野球をやり過ぎたせいか立教大学には現役では、受からず一浪してやっと法学部に合格しました。喜び勇んで野球部の門をたたき「入部したい」と申し込んだのですが「甲子園に出ていないと入部を認められない」と、あっさり断られてしまいました。「ではマネジャーでもいいから」とねばったのですが、「もう決まっている」と冷たい返事。その頃の、立教大学は、まだ野球で入学できた時代でしたので、少数精鋭をモットーにしていたため、無名の選手を入れるわけにはいかなかったようです。

またこの時、横浜国立大学も受験しました。午前中の試験は、ほぼ完璧にできました。昼休みに弁当を食べながら野球部の練習を見たのですが、なんとレベルの低さに幻滅してしまいました。午後からの試験も順調にできました。その時「やばい。このままだと合格してしまう。まわりは、立教ではなく横浜国大を勧めるに違いない。そうすると恋焦がれてきた立教大学との絆が永久になくなってしまう」。そこで残りの試験を受けないで帰ってきてしまいました。作戦成功で晴れて立教大学へ入学することができたわけです。

野球部には入れてもらえませんでした。神宮での試合は、四年間全試合学生席で応援しました。野球部員たちとも仲良くなり宿舎にも頻繁に出入りしました。

就職先は、野球記者を目指していたので、新聞社でした。職種は、なぜかカメラにはまったくのド素人なのに写真記者として配属されました。

卒業したころから立教大学も徐々にスポーツ入学の枠が年々減少。野球名門校からの進学が難しくなってきました。さらに学園紛争でスポーツ推薦は完全に廃止。野球部には、勉強でしか入れなくなり、それこそ無名高校や浪人生ばかりで、まったくの狭き門と化しました。毎年入ってくる選手は二、三人。あとは部長、監督、それに私も加わって野球経験者に電話連絡して口説き落とす戦法で、やっと十人前後になる状況でした。このときほど「もう少し遅く生まれてきていれば…」と自分自身の運命のなさを嘆きました。

新聞社勤務ということもあり、私は全国の高校野球事情を他の人より早く入手することができました。「勉強ができて野球の上手な高校生はいないか」と必至に探し回った頃でもあります。そんな高校生がいると聞くや休みの日を利用して学校まで足をはこび、部長、監督、本人に接触。場合によっては親を含めて立教大学進学を推奨しました。また夏に行われていた野球部セレクションを「勉強会」と名を変え、英語、国語、社会の模擬テストを行い成績の良い選手を徹底的にマークして受験指導もやりました。模擬試験の問題は、私が家の謄写版で手を真黒にしながらか作っていました。受験時代か

ら大分過ぎていたので、忘れてしまったことも多く何度か暗礁に乗り上げたこともありました。そのため部長、監督と相談の結果、女子マネージャーを募集。主に受験指導をお願いしました。今でこそ彼女たちは、食事当番、ホームページなどと手広く活動してくれていますが本来は、受験指導がスタートだったわけです。

この勉強会は、かなりの成果が出ました。受験生たちも野球部の誠意を感じとってくれ一、二浪はもとより三、四、五浪までして野球部の門を叩いてくれました。私は、自分が勤務している朝日新聞に三、四、五浪の選手が入学するたびに記事に仕立てあげ紙面に掲載しました。その影響もあって「立教は勉強ができないと入れない」が高校野球界に広く浸透しました。また卒業後も、企業側が、スポーツ選手としてではなく、一般学生と同じ高い評価をしてくれたため、多くの人材を一流企業をはじめ、幅広く世の中に送り出すことができました。

現在は、立教大学も一般受験以外に指定校推薦、自由選抜、帰国子女など受験方法もいろいろな方法があり、おかげで150名の大所帯となりました。中には甲子園で大活躍した有名選手もいます。近い将来、待ちに待った優勝もあるでしょう。

でも私個人としては「優勝」よりも立教大学野球部員は「社会で頑張れるリーダーの人間に育って、良い人生を歩んで欲しい」といつまでも願っています。

★1990年代は、日本の各大学野球部が米国で、キャンプを始めたころです。例えば、慶応大が西海岸で、東北福祉大が西海岸とフロリダで、といったように…。

私自身も東北福祉大のキャンプに同行させてもらい、学生たちが生き生きとして練習しながら、同時に米国の人たちと触れ合いながら貪欲に文化や風習などを吸収する様子を目のあたりにして非常に意味のあることだと感じていました。我が立教大学も、何とかして行くことができないだろうか。特にこれからの若者たちは、日本という国にとらわれないグローバルな思考と素養が要求されます。そんなことから一度でも外国を経験しておけば、物の見方も変わってくるし、それなりの刺激を受け、外人コンプレックスもなくなるのではないかと考えました。

そこで、アメリカへ行った際、ロス立教会の重鎮でおられる水谷しげお大先輩に相談したところ、「私たちが迎える準備をしましょう」と言っていただきました。

ロス立教会の強力なご支援をいただき1998年2月末に第1回の米国ロスキャンプが実現しました。

第2回目の予定だった2001年は9.11事件の関係で残念ながら中止となりました。以後、3年おきの2月末に2004、2007年とお世話になっています。時期的に2月だと4年間で1回は参加できます。もちろん就職活動などの諸般の事情で参加できない選手たちも毎回います。言い出しっぺの私も、全期間ではありませんが過去3回参加させてもらっています。

来年は、第4回目のロスキャンプです。選手たちも今から楽しみにしています。

## <立教学校の設立>

1867(慶応3)年、日本で大政奉還が行われたことを知ったウィリアムズは、日本での伝道の可能性を感じ、中国から、日本の通商の中心地であった大阪へ移り住みましたが、切支丹禁止の高札の撤去を受け、大阪から東京へ移りました。

ウィリアムズ主教が立教学校を設立したのは1874(明治7)年2月、東京移転後、わずか3ヶ月のことです。日本人にキリスト教を広めていく為、日本人聖職者の育成を目的として立教学校は設立されたのです。築地の居留地の一角に建てられた立教は、単に「ボーイズスクール」という呼称の元にたった8名で始まりました。教師は、学校設立者のウィリアムズと校長のブランシェーの二人、聖書と英語を教える小さな私塾でした。

この小さな学校も発足翌年の1875(明治8)年には、「立教学校」の校名が新聞紙上にも見られるようになり、学生数も徐々に増加するようになります。しかし、発足2年後の1876(明治9)年11月、校舎が火事により全焼するという災難に見舞われます。在校生55名のうち46名が寄宿生であった学生達は、焼け出されてしまったのです。

土地の購入や建設に多くの費用が必要となり、ウィリアムズ主教は多額の私財を投じ不足分に充てます。この時校舎と寄宿舎を兼ねた本建築が建てられ、学校発展の基礎が築かれたのです。主教が「立教学校」に英名「セント・ポールズ・スクール」を命名したのはこの頃のことです。

.....  
編集後記

8月号の発送を、母校創立135周年を記念して8月8日に行いましたバイオリンとピアノのコンサート後に考えた為、少々遅れました。お詫びいたします。

7月10日ディズニーホールで行われました380名もの日系人による、第九の大コーラスは、そのヴォリュームと、長期にわたる練習でつちかわれた質の高さで、感動的なものでした。8月8日のサマーコンサートはLA立教会でもおなじみのピアノのDr. Taguchiと、バイオリンのMr. Iticoviciの素晴らしい共演で、聴きにいらした250名以上の方々に魅了いたしました。聴衆総立ちの拍手の嵐のうちに終わりました。この素晴らしい音楽を聴く機会を逃されたかたは、残念なことをなさったと思います。

今回も多くの方の方が記事を寄稿してくださり、さらに読み応えのあるものになったと思います。市川さん、上井さん、長田さん、坂本さん、澤田さん、笹田さん、有難うございました。又シカゴ立教会会長の安藤さん、日本から、野球部アメリカ遠征第一回から参加されていらっしやる大友さん、そして清里 KEEP からは Miss Laura Vilanova より記事をいただきました。御礼申し上げます。

次回2月号に関して、こういう企画は?というものがございましたらお知らせ下さい。また会報に携わってみたいとお考えの方、ぜひご一報ください。

孫恵美記